

# Wesley Hall News

ウェスレー・ホール・ニュース

March, 2023 No.141

それゆえ、信仰と、希望と、愛、  
この三つは、いつまでも残ります。  
その中で最も大いなるものは、愛です。

コリントの信徒への手紙一 第13章13節



# 置いておきなさい 聖書はずっと手元に

大学宗教部長  
塩谷直也

青山学院で強制的に(?)買わされた聖書を「卒業後も読め」とは言いません。なぜならあなたはこれから多くの場面で、形を変えて聖書を読むからです。聖書、すなわち「福音＝良い知らせ」と思いがけない場所で出会うからです。

俳優の高知東生さんはかつて薬物依存で苦しみ、現在は依存症から立ち直る人々をサポートしています。その彼が著書で語ります。「依存症に完治はありませんが、これは不思議な病気で、回復し続けるためには、同じ依存症に苦しむ仲間達を助けていく必要があるのです。『助けるものが助けられる』そんな原理で回復し続ける病

気なのです」(『生き直す 私は一人ではない』より)

この言葉を読み、皆さんの頭の中に聖書の言葉が浮かびませんか？

**与えなさい。そうすれば、自分にも与えられる。**〔ルカによる福音書 6章38節〕

あなたがたもこのように労苦して弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与えるほうが幸い』と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきました。〔使徒言行録 20章35節〕

**互いに重荷を担いなさい。**〔ガラテヤの信徒への手紙 6章2節〕

高知さんの言葉から、ふと聖句がよみがえるように、たくさんの涙と笑いを経て、忘れていた「良い知らせ」が体の中で響きだします。在学中は

人を助けるどころか、自分のことで精一杯だったでしょう。でも卒業後、自分のことだけを考えると、どこかで人生の歯車が回らなくなる場面がやってきます。その時、不思議な「良い知らせ」が聖書以外の世界から聞こえます。その世界は私たちに日々教えます。私たちが皆「不思議な病気」にかかっていることを。目の前の現実、言葉少なに指し示します。私たちが一人残らず「助けるものが助けられる」という原理で生かされているということを。それは他でもない、「地の塩、世の光」を掲げる母校で、あなたが学んだことなのです。

私は目の病で状況に合わせて色つき眼鏡をかけます。その眼鏡をかけた瞬間、世界がその色に染まりますが、やがて慣れると色つき眼鏡をかけていることを忘れます。「良い知らせ」もこれに似ています。「与えなさい。そうすれば、与えられます」とのイエスの言葉に私たちは感激し深く胸に刻むのですが、時間と共にその言葉の大切さを忘れます。

皆さんは青山学院で「良い知らせ」眼鏡を与えられましたが、やがてその眼鏡をかけていること自体を忘れるでしょう。でも人生の節々で、世界が教えてくれます。地球上のすべての人が皆「不思議な病気」に苦しんでおり、「助けるものが助けられる」原理を必要としていることを。その真実にいつでも気づける「良い知らせ」眼鏡を、青山学院から授けられていたことを。さあ、その時あらためて聖書にもう一度帰りましょう。読んでみましょう。私はその日が皆さん全員に訪れると信じる一人です。だから…聖書をずっと、ずっと手元に置いていてくださいね。





# 子どもの祈り

When Children Pray

幼稚園教諭 近藤希望



戦争をしているところで眠れない人がいたら  
夜に安心して眠れますように  
喧嘩した人を助けてください  
嘘をついてごめんなさいを言いたくても  
言えない人を守ってください  
神様を忘れていても守ってください  
病氣の人、怪我の人、  
元気な人も守ってください  
神様を忘れて間違ったことをしてしまう人も  
守ってください

このお祈りは、平和を祈る会という礼拝で捧げたAちゃんのお祈りです。今年は、平和を祈る会として毎月礼拝を捧げてきました。保育者は、今世界で起きていることを子どもたちにわかるように伝え、子どもたちも自分の言葉で平和を祈りました。この祈りが世界の平和へと広がっていきますように、また祈ることが子どもたちの心の支えとなりますように。

## 卒業する、いま

新しい一歩を踏み出す人、仲間を送り出す人——  
幼稚園から大学みなさんに、今の想いを聞きました。

教育人間科学部心理学科4年

齋藤詩音

### 善い計画

私の大学4年間は神様の導きを強く感じた4年間でした。

キリスト教推薦で青山学院大学に入学し、青山キリスト教学生会（ACF）に所属し、多くの仲間と時間を過ごす中で神様の偉大さと愛の大きさを知りました。人が好きで友達と会ったり遊んだりすることを楽しみにしていた私にとって、コロナで友達と会えず思い描いていた学生生活が送れなかったことは相当なストレスでしたし、“神様なんでええ”と嘆きたくなることもありました。しかし、そのような中でも神様はその苦難を乗り越えられる仲間と環境を与えてくださいました。一つ一つの選択や苦難が、全て用意された計画の過程であり、私が成長するために必要なことでした。

これから社会人になり、新しい環境に行くことは正直不安でいっぱいですが、私のこれからの道も全て神様によって備えられていることを信じ、歩んでいきたいです。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」（エレミヤ書29:11、新共同訳）



高等部教諭 平野武士

## 信じて生きる

コロナ禍にあったため6月に入学式を行い、見通しのたたない中を手探りで進んでいった3年間。

今までの多くの卒業生が当たり前であった日常が送れませんでした。PS講堂に毎日集い賛美歌を歌い、奨励を聴き、頌栄を歌うという日常が今でも難しい状況です。そのような状況でも、高等部生活で多くの「み言葉」に触れ、勇気づけられたのではないかと思います。

生きるためには力強い「み言葉」によるメッセージが必要です。その「み言葉」があるから、今を生きられ、前に進めます。勇気づけられた心は、目に見えない何者かに護られた自分を信じさせてくれます。「これから自分が進む道」を護られていることを信じて力強く生きていけるように心から祈っています。



3年 坂本 澤

## 支えられた

## 高等部生活に感謝

私たちの学年は入学式を行わないままオンラインで授業が開始され、外部生の私は孤独感に苛まれました。

新しい環境に順応するのが苦手な私にとって、このような高校生活の始まりはより一層辛いものでした。

登校が徐々に始まっても学校に通う意義が見出せず極限の精神状態で過ごしていました。そこで出会ったのが「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。」(マタイ7:7)という聴き馴染みのある聖句です。

その聖句に感化され、状況を能動的に変えるしかないとオルガン部と美術部に所属し、2年次には文化委員長として生徒会活動に携わるようになりました。

両部活の幹部と生徒会活動、勉強を両立することは非常に困難で、ときには体調管理が行き届かないこともありました。度々挫折しそうになりましたが多くの友人や先生方の支えで乗り越えることができました。ですが、隣人を愛せよ、の教えのもと、高等部で出会った支え合う人々に救われました。

私を暗闇の中から救ってくれるのは聖書や礼拝だったなと高等部生活を振り返って感じています。





中等部教諭 竹内 隆太郎

## 「絶えず祈りなさい」

(テサロニケの信徒への手紙 — 5章12～18節)

日曜日の試合前、ラグビー部では仲間が集まって「お祈り」の時間を持ちます。静かに目を閉じて「神様」と語りかけるとき、亡くなった祖父母や父の顔が心に思い浮かび「がんばれ」と応援してくれているような気持ちになることがあります。

神様へ感謝の言葉を探していると「嬉しい事」が頭のなかにひろがっていきます。楽しみにしてきた試合ができること・仲間が集えたこと・相手がいること……、試合を支えてくれる人への感謝の気持ちがひろがっていきます。

「心折れることなく戦い抜くことができますように」

「大きな怪我人が出ませんように」

「ここに集えなかった仲間にも我々以上のお恵みが与えられますように」と神様にお願いをします。部員が続けてお祈りをしてくれます。

「アーメン」でお祈りが終わり目を開けて仲間の顔をみると、不安や不満に飲み込まれていた心の曇りが晴れていくのを感じます。自らの弱さに立ち向かう「勇気」が与えられたように感じます。試合に向け、楽しい気持ちに心が満たされていきます。

みんなとの大切な時間です。これからも大切にしたい時間です。

ONE FOR ALL, ALL FOR ONE



後列右端：竹内隆太郎、  
前列中央：岩崎雄太



3年 岩崎雄太

## One for all — タラントを誰かの為に

(マタイによる福音書 25章14～30節)

僕はラグビー部に入っています。ラグビーのイメージを人に聞くと体格の良い人が多い、転んで痛そう、チームプレーのスポーツ等と言われますがラグビーを続けていると単純にぶつかり合うだけのスポーツでは無いと思うようになりました。

日本ラグビーフットボール協会はラグビー憲章で「品位・情熱・結束・規律・尊重」をコアバリューと示しています。互いに激しくぶつかり合うスポーツの為にルールを守る。感情的な行動を取らず、チームメイト、先生、監督やコーチ、保護者に支えられている事への感謝。相手チームへのリスペクト。これらを大切にします。勝負の結果に気持ちが揺れたり、練習を休みたいと思う事もあります。

でも気持ちを優先せず、自分のできる事で他者の為になる事があるとラグビーから学びました。そしてそれは普段の学校生活や家でも同じだとこの3年間を通して思うようになりました。実際には自分の気持ちを優先してしまう事も多く、これから神様から与えられた僕のタラントを誰かの為に使えるような努力や、「One for all」の気持ちを行動に移せるようにしたいです。

左:佐々木淳、右:川村直央



初等部教諭 佐々木 淳

## 「地の塩・世の光」で、<sup>あ</sup>在り続けよう

6年の間にたくさんの学びと成長がありましたね。新型コロナウイルスの流行やウクライナでの戦争など社会的に大きな出来事もありました。その中で、初等部にいたからこそ学べたことは何だったでしょう。米山梅吉先生の「人にされて嬉しかったことを人にもせよ」のお話やそれをもとにできた初等部の「5つの約束」、学院のスクールモットーの「地の塩・世の光」、サーバント・リーダーという人のあるべき姿、つまり、青山学院が一番大事にしているキリスト教の教えや考え方が、今すでにみなさんの心の中にはしっかりと根付いているのだと思います。これからの人生の中で、自分のことだけを追い求めるのではなく、仲間や隣人のことも大切にし、ともに歩む心を持ち続けて大きく羽ばたいてほしいと願っています。

最後の2年間をすてきな6年生のみなさんと一緒に過ごせたことを心から感謝し、これからのみなさんの上に神さまの恵みが豊かにあるように祈っています。

「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。」

(マタイ5:16)

6年 川村直央

## 卒業するいま

僕は5年生の時にふと「洗礼を受けてみたいな」と思い、その思いに突き動かされるように受洗をしました。受洗をしてからは毎日の礼拝のお話を聞いて、もう一度自分自身で考え直すようになりました。それによってお話が単なる先生のお話としてではなく自分の事として、頭の中に入って生活に繋がられるようになりました。

僕は3年生からラグビー部でした。ラグビーを続けているなかで「楽苦美」の意味と「One for all, All for one」の大切さがわかりキャプテンになりたいと思いました。

6年生の1学期、僕はラグビー部のキャプテンになりました。キャプテンになってからは「人にしてもらいたいことは何でも人にしなさい」という聖句を思いながら、下級生にもっとラグビーを楽しんでもらうためになるべく優しく振る舞ったり、練習の準備を早めに行ったりと色々な事をしました。

下級生が楽しそうにラグビーをしているのを見て「下級生の為に神様は僕をつかわしてくださったんだな」と思いました。





幼稚園保護者会会長 佐藤 藍

## 神様を信じ、 祈りがあるなかで

新型コロナウイルス流行初期の入園から、数々の休園を乗り越え、一日一日大切に歩み続けた三年間があったという間に経ちました。

年少時代、自分がやりたいと思った工作に無我夢中で取り組み、時には先生やお友だちの力を借りながら、作り上げる喜びを大いに感じ、疲れ果てるまで遊びました。年中時代、遊びの行き先々で会えるお友だちは、学年を越えて仲良くなりました。やがて年長になり、軽井沢キャンプ、運動会のリレー、クリスマスページェントで大切な役目を務め、お友だちとの結束力が次第に高まっていきました。

一人でやりたいという年少から、年中、年長を経て、皆で成し遂げたいという心の成長を逞しく感じました。これも、神様を信じ祈りがある中で、温かな先生方の見守り、お友だちの存在、そして保護者の皆様が一丸となって子ども達を育みましょうというご協力のもと、心豊かな幼稚園生活を送る事ができました。

休園や行事が行えなかった日々から、少しずつ幼稚園本来の姿へ戻っていく様子を見届ける事ができ、行事の有り難さにも触れ、お支えくださった全ての皆様へ感謝申し上げます。



右:岡林亜季、  
左:橋本治奈



幼稚園教諭 岡林亜季、橋本治奈

## いつも神様とともに

卒園が近づいてきた子どもたちと神さまのことを話していると…「神さまって光みたいに僕たちのことをいつでも包んで守ってくださる人だと思う」「神さまのお話は何度聞いても面白い。神さまが人間をつくったって聞いたときは、やっぱりこんなことは神さまにしかできないはずだなんて思ったよ」「お祈りするといつもほっとするの」「神さまは私のこと大好きなんですよ。私も神さまとイエスさまが大好き！ イエスさまに会えたらいいのにな」と神さまへの想いが次々と溢れ出ていました。この子どもたちの姿から、これまでの幼稚園生活を通して、神さまへの信仰が培われて、神さまの子どもとして大きくなったことを嬉しく感じました。

嬉しいときも悲しいときも、神さまはいつでも傍にいて守ってくださいますから、これからも神さまに祈りながら、安心して過ごしていられることを願っています。幼稚園の先生たちはいつでも皆さんのことを待っていますから、困ったり悩んだりしたときには会いに来てくださいね。ご卒園おめでとうございます。



# 私が学んだ 聖書の言葉

青山学院で学んだ日々。この学び舎で学び、一人ひとりを支え、  
励まし、導いてくれた聖書の言葉。

新たな旅立ちのいま、初等部から大学の皆さんに、  
聖書から学んだことを綴っていただきました。

*The Word of God is  
alive and active.  
Hebrews 4:12*

## 主のしつけと諭しによって育てなさい。

エフェソの信徒への手紙 6章4節

大学教育人間科学部教授

大森秀子

この聖句は主にある子育てを示している。この養育が駝鳥の教育と対比されるのを知ったのは、米国近代宗教教育の父と呼ばれるブッシュネルの思想を通してである。ヨブ記 39章 14～17節には、産んだ卵を地面の中に埋め砂で暖め、野の獣によって踏みにじられることに無頓着な駝鳥が描かれている。カーライルもまた駝鳥の教育を反面教師とした。カーライルの『衣服哲学』に登場するトイフェルスドレック教授は誕生後すぐにアンドレアス老夫婦に預けられた。子どものそばに置かれた洗礼証明書には、ディオゲネスというクリスチャン・ネームが記されていた。名前はこの世に生まれた人間の最初の衣服である。衣服に包まれた魂はそのまま放置されてはならない。幸いにも12歳の時に父母が育ての親であることを知った彼の内面は破壊されておらず、後に宇宙・自然の本質へと思索を深める。子どもが神の愛に守られ、永遠を思う心が育てられることを願う。



あなたが  
主はこう言われる。  
私は主、あなたの神。  
私はあなたの益となることを教え  
あなたの歩むべき道にあなたを導く。  
イザヤ書 48章 17節



大学総合文化政策学部4年

ラサン イースター

2020年の私の日記にこの聖書の言葉が書いてありました。当時、書いた理由は覚えていませんが、イレギュラーとなったコロナ禍で過ごした学生生活で私の心の支えになった言葉であるのは間違いありません。その時を思い返すと、悩み苦しみ、大変だった時にはいつも私を支えてくれる助け手が与えられました。その助け手は神様が与えてくださり、時間がかかっても私を正しい道に導いてくれたのだと思います。この出来事を通して神様はどんな状況でも共にいてくださることを実感しました。

学生生活が終わり、4月からの新生活で不安と期待の気持ちが混ざっていますが、益とされる神様の力を信じて、備えられた道を力強く歩んでいきたいと思っています。



あなたがたは  
キリストの体であり、  
一人一人は  
その部分です。

コリントの信徒への手紙一

12章 27節

高等部聖書科教諭

北川理恵



なぜあの人が持っているものを私は持っていないのか。なぜあの人が  
できることを私はできないのか。そんな風に他人と比べてばかりいた私の  
価値観が大転換するきっかけとなった言葉です。

12章 12～27節は私たちを一つの体に例えています。自分を中心に  
物事を見ていた時は、望むものを持っていない自分は価値が無いように  
感じていました。でも、「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。  
もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。そこで神は、御心のままに、  
体に一つ一つの部分を置かれたのです」という言葉によって、神様が望  
んで今の私を存在させてくださっているのだと知りました。そして、神  
様の望みのままに用いてくださいと祈るようになりました。私が持って  
いない力を持っている人、私と違う性格の人がいることは、脅威ではな  
く、豊かさなのだと教えてもらいました。

今でも人と比べて落ち込んだり、考えの違いに戸惑ったりすることも  
ありますが、そのたびにこの聖句を思い出します。

教えはシオンから 主の言葉はエルサレムから出るからだ。

主は国々の間を裁き多くの民のために判決を下される。

彼らはその剣を鋤に その槍を鎌に打ち直す。

国は国に向かって剣を上げず もはや戦いを学ぶことはない。

ヤコブの家よ、さあ、主の光の中を歩もう。

イザヤ書 2章 2～5節（一部抜粋）

中等部3年

岩田優衣

愛と平和



私達74期生は様々な制限があった中でも礼拝、聖書の授業などを通  
して神様を知ることができました。特に記憶に残っているのはこの非戦  
平和思想を語っている聖句です。私は初めて目にしたとき、なんて不可  
能なことなのだろうと感じました。剣を鋤とし槍を鎌にうちかえる「真  
の平和」、それは私には夢物語のように思えたのです。

しかし、友人と緑蔭キャンプに参加し、人間の心には必ず隣人愛が存  
在するということを学びました。平和は愛によって実現します。その愛  
を神様は人間に備えていてくださいました。神様から頂いた愛を、私た  
ちは忘れてしまっているのです。

愛の精神を思い出すために私たちは何をすればよいのか。平和が失わ  
れつつある今、神様は私たちに問うていてのではないのでしょうか。



だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。

いなくなっていたのに見つかったのだ。

喜び祝うのは当然ではないか。

ルカによる福音書 15章 11～32節「いなくなった息子」のたとえ（一部抜粋）

初等部 6年

国友 心



私は放蕩娘

初めて「放蕩息子」のたとえ話を聞いた時、（まじめなお兄さんがかわいそう。お父さんは自分勝手な弟に甘すぎる。）、弟と母の顔を頭に思い浮かべながら、私はもやもやしていました。

ところが、6年生になり初等部生活を振り返る機会が増えると、これまでやらかした失敗の数々を思い出し、（おやっ？ 私は兄の立場だと思っていたけれど、ひょっとして放蕩息子の方では？）と思うようになりました。最近、彫刻刀でグサッと手を切って4針縫ったし、事務室を探して学校で迷子になったこともあったなあ、日本庭園で池ポチャもしたなあ、と。

たくさん失敗しても、支えてくださった先生方に感謝しつつ、私も他者の失敗に寛容で、喜びを分かち合える人になりたいです。

#### 編集後記

卒園、卒業を迎える皆様おめでとうございます。友だちや先生と過ごした日々の中で、楽しかったこと、嬉しかったこと、時には思い通りにならなかったこともあるかもしれません。その一つひとつの経験が成長の糧となったことでしょう。今回の卒業号であるウェスレーホールニュースには、神さまの守りと導きの中でこれまでの日々を歩んできたということを多くの人が書いていました。青山学院が幼稚園から大学院まで等しく大切にしている「礼拝」が一人ひとりの生活の土台となり、主に信頼して歩んできたことが感じられます。これからどのような道が与えられても、それが自分にとって最善の主の導きであると感じて、安心して歩んでいくことができますように。最後に、新たな一歩を踏み出そうとする人に心を寄せて、この聖句を贈ります。

「主は人の一步一步を定め御旨にかなう道を備えてください。人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。」（詩篇37:23）

幼稚園教諭 石垣李沙

Wesley Hall News 第141号

2023年3月2日 発行

発行 青山学院宗教センター  
学院宗教部長 伊藤 悟

編集 青山学院 Wesley Hall News 編集委員会  
〒150-8366  
東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL 03-3409-6537 FAX 03-3409-8865

URL <http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>

MAIL [agcac@aoyamagakuin.jp](mailto:agcac@aoyamagakuin.jp) みなさんの感想をお聞かせください



青山学院スクール・モットー

## 地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13-16節より)